

今年の夏はいつになく、戦争のことを身近に感じる夏となりました。戦争の加害を語る元兵士の方のお話を聞く機会があり、そして教科書問題。扶桑社の戦争認識・記述に怒りを感じながら、検定を通った歴史教科書すべてについて、戦争の記述やその中で女性や子どもたちの描かれ方を調べました。また、戦争を語る報道写真展やイラクの戦時下の家族を映し出した映画『リトルバード』の上映会と綿井監督の講演。そして地雷と隣り合わせの生活を強いられた子どもたちが主人公の映画、『亀も空を飛ぶ』も衝撃的でした。八王子では戦後60年の企画として、『戦時下の市民生活』と題した展示があり、八王子空襲や戦争体験を聞く機会ももてました。夏の暑い盛りに『女たちの戦争と平和資料館』もオープンとなりました。でも私にとって、広島も沖縄もそしてこの松代も遠かった。そんな私に、昨年、このツアーに参加した友人が声をかけてくれました。「とっても充実したツアーで、いろいろ勉強できるんだよ。今年もあると思うから、いってみるといいよ」。この一言がなければ、行きたいなあといった漠然とした気持ちは、形にならなかったでしょう。そして今、この気持ちは確かなかたまりとなって、あの壕の中のひんやりとした、しかし人の気配がゆらゆらとあるような感触をいつまでも思い起こさせてくれます。

8月6日の朝、集合場所で、友人の2人と会い、3人での今回のツアー参加が始まりました。バスのなかで、今回の主催者団体の紹介をうかがい、皆さんの主任手当拠出金を使わせていただくことにちょっと後ろめたい感じも抱きました。部外者である私たちを快く受け入れてくださったことに感謝します。そして、「無駄にしないから」と、身を引き締めたしだいです。

少しの時間も大切に、バスの中での事前学習のビデオ上映に、実行委員の方々の熱意が伝わってきました。

予想外の渋滞に、バスに揺られること5時間、総延長11kmの地下トンネルの入り口を前にして、厳粛な気分になりました。案内役の原山茂夫さんは、ご自分で書かれた画用紙大のダンボールに絵などを書いた資料を手に、熱心に説明してくださいました。どれだけの人が、この壕を掘るのにかりだされたのか。どんな栄養・衛生状態であったのか。日常の生活は？ 子どもは？ 女たちは？ わからないことがまだまだ多い、この地下壕建設ですが、はっきりしていることは、B29の爆撃にもびくともしないという堅牢な岩盤に碁盤の目のように交差した幾すじもの壕の存在であり、それを6000人とも7000人とも言われている人の手とほんのわずかな道具で、わずか10ヶ月の短い間に作っていたという事実であり、作業していたのは、圧倒的に朝鮮からの労働者であり、強制連行でつれてこられたもの、賃金を求めて自発的に移ってきたもの、名前さえわからず、この地で無念の死を遂げたもの等、一人一人の想いが、行き場を失い、まだ、戦争が終わっていないことを私たちに語りかけてくるのです。

「人の命を命と思わない点で、松代大本営は日本のアウシュビッツだ ― 朴 菖熙」は、今回の参加資料の表紙の言葉です。こういった言葉が、リアリティを持って、壕の中にいる私たちを打ちのめします。

従軍慰安婦の家の保存運動においてもしかり。ここで何が行われていたのかという事実よりも、歴史から葬り去りたいという力が働く現実的な姑息な知恵との戦いがあります。隠しても隠し切れない事実であるにもかかわらず、まっすぐに見据えることを避けてきた60年だったことをこの壕は静かに語りかけてきます。

